1975、2.15
毎日

再会を喜び抱き合うアイザック・スターン（中央）と森繁久彌＝日生劇場で

森繁とアイザック・スターンが抱き合った

「ボクを覚えているかい」「どうして忘れるもんか」――十四日夕、東京・日比谷の帝国ホテル二階ロビーで、肩を抱き合って再会を喜んでいる二人の紳士が人目を引いた。現在、同ホテル隣の日生劇場で再演中の名作ミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」で主人公、テヴィエを演じている俳優、森繁久彌さんと十六日夜、東京で開かれる演奏会のため来日中の米国の世界的バイオリニスト、アイザック・スターン氏。約八年前、やはり森繁さん主演で日本初演されたこのユダヤ人の物語を、同じユダヤ人であるスターン氏が見ていたく感動、森繁さんを訪ねたことから深い友情が生まれていたが、たまたま今回、同時期に両者のステージが重なったため、この対面が実現した。映画になったこの作品の主題曲も弾いているスターン氏は、同夜、森繁さんの求めに応じてカーテンコールに登場、舞台にすばらしい花を添えた。

二人の出会いは四十二年十月にさかのぼる。東京有楽町の帝国劇場で「屋根の上のヴァイオリン弾き」の稽古の合間を縫って、事務所から「アイザック」と名乗る外人の来訪を取り次ぐインタホンがあった。指定した喫茶店に森繁さんが出向くと、男は興奮して森繁さんに抱きつき、「どうしてこんなところで会えるのか」と、驚いた森繁さんをほめた。

「ぜひ、練習場へ来てほしい。私の〝最高の心〟をお聴かせする」という、この〝アルセイユの居酒屋のオヤジのような顔をした男〟（森繁さん）は、実は有名なバイオリニストのスターン氏だったわけだが、森繁さんは連日の舞台あって、せっかくの申出を受けることができず、そのまま八年が過ぎた。しかし、「いつか、必ずもう一度会おう」という約束通り、森繁さんは決して忘れることがなかったという。

「屋根の上のヴァイオリン弾き」は、放浪のユダヤ人作家、ショム・アレイケムの小説を下敷きとして一九六四年、ブロードウェイの舞台にのった作品。帝政末期のロシアの一寒村に、身を寄せあうユダヤ人たちが、どのように生活の過酷に耐え、どのように希望や喜びを見出し、そして、権力の弾圧下に、どのように〈ディアスポラ〉（離散）していったかを、描いたものだった。日本では四十二年に故菊田一夫氏が企画して初めて上演された。

この切ないまでの舞台に、スターン氏は革命直後、ソ連を〈ディアスポラ〉させられた一家の涙しみを重ね合わせたのだった。

この日午後四時すぎ、スターン氏は、東京芸術劇場で行われたNHK交響楽団とのリハーサルもそこそこに帝国ホテルへかけつけた。先に着いていた森繁さんと視線が合うと、二人は小走りにかけ寄り、肩をたたき、手を取り合って席へ。きのう別れたばかりの友人同士のような打ちとけたやりとりが始まった。テヴィエを演じる森繁さんについての感想を求められたスターン氏は、森繁さんに葉巻を勧めながら「人間的、という一語につきるすばらしい演技だ」と、八年前と同じ賛辞を述べたあと「二人ともユダヤ人だから、すぐわかり合えるんだ」と森繁さんの顔をのぞき込みながらジョーク一言。そして、しんみりした口調で「戦争や因習など、日本人とユダヤは共通の伝統や悲劇を背負ってきている。だから、この舞台はわれわれにも日本の人たちにも感動を呼ぶのだと思う」

ウン、ウンとうなずいていた森繁さんも「私も戦争で満州（中国東北部）から追われ、着のみ着のまま帰ってきた。そうした心情は、一種のディアスポラ〈によるものだと思う」と、昔を思い出しているような表情だった。

「ぜひ、今夜の舞台を見てくれ」という森繁さんの申出に対し、スターン氏は「六時から練習をあって、せっかくの申出を受けることができず、そのまま八年が過ぎた。しかし、「いつか、必ずもう一度会おう」という約束通り、森繁さんは決して忘れることがなかったという。

「屋根の上のヴァイオリン弾き」は、放浪のユダヤ人作家、ショム・アレイケムの小説を下敷きとして一九六四年、ブロードウェイの舞台にのった作品。帝政末期のロシアの一寒村に、身を寄せあうユダヤ人たちが、どのように生活の過酷に耐え、どのように希望や喜びを見出し、そして、権力の弾圧下に、どのように〈ディアスポラ〉（離散）していったかを、描いたものだった。日本では四十二年に故菊田一夫氏が企画して初めて上演された。

この切ないまでの舞台に、スターン氏は革命直後、ソ連を〈ディアスポラ〉させられた一家の涙しみを重ね合わせたのだった。

この日午後四時すぎ、スターン氏は、東京芸術劇場で行われたNHK交響楽団とのリハーサルもそこそこに帝国ホテルへかけつけた。先に着いていた森繁さんと視線が合うと、二人は小走りにかけ寄り、肩をたたき、手を取り合って席へ。きのう別れたばかりの友人同士のような打ちとけたやりとりが始まった。テヴィエを演じる森繁さんについての感想を求められたスターン氏は、森繁さんに葉巻を勧めながら「人間的、という一語につきるすばらしい演技だ」と、八年前と同じ賛辞を述べたあと「二人ともユダヤ人だから、すぐわかり合えるんだ」と森繁さんの顔をのぞき込みながらジョーク一言。そして、しんみりした口調で「戦争や因習など、日本人とユダヤは共通の伝統や悲劇を背負ってきている。だから、この舞台はわれわれにも日本の人たちにも感動を呼ぶのだと思う」

ウン、ウンとうなずいていた森繁さんも「私も戦争で満州（中国東北部）から追われ、着のみ着のまま帰ってきた。そうした心情は、一種のディアスポラ〈によるものだと思う」と、昔を思い出しているような表情だった。

「ぜひ、今夜の舞台を見てくれ」という森繁さんの申出に対し、スターン氏は「六時から練習をしなければならないが、九時にはきっとかけつける」と約束。そして同夜九時すぎ、ユダヤの村人たちがロシア官憲の強制でディアスポラ〈してゆく最後の場面を見たあと、森繁さんや出演者と一緒にステージに立った。満員の観客は、思わぬ〝贈り物〟に大かっさい。テヴィエの女房ゴールデ役の上月晃から花束を受け、娘役を演じる淀かほるや信貴千恵子らに囲まれたスターン氏は、森繁さんと肩を組んだ抱き合い、目に涙をうかべながら「グレート、ビューティフル、アイ・クライド」と何度も何度もくりかえし、森繁さんも強くスターン氏を抱きかえす感動的なフィナーレ、観客の拍手もいつまでも鳴りやまなかった。

舞台がハネてから二人は、日本通のスターン氏が指定した乃木坂近くの〝鳥料理〟で乾杯。歓談尽きぬ趣だったが、さて、今回の再会で、森繁さんは、スターン氏の名演をじっくり聴かせてもらうことができるかどうか――。

× × ×

スターン氏は十六日午後七時から上野の東京文化会館で開かれるバイオリン協奏曲のタ〈でN響と共演、十七日に離日する。

1974.11.17 毎日

アイザック・スターン氏の演奏を私は断っちゃった

知らぬこととはいいながら

森繁 久彌

ときどころ新聞にオイストラフ氏の死が伝えられていた。そういえば、青年時代、ハイフェッツ、シンバリスト、エルマン、わからぬままに西洋人の音楽会は、ハイカラ者自負して行ったものだが、もうそれっきりで、私はこの人の著日の時の演奏は聞かなかった。この世界的なバイオリニストの死から急に思い出すことが一つある。

かつて、七年前、帝劇で"屋根の上のバイオリン弾き"というミュージカルを演(や)っていた時、昼と夜の休憩の間に、楽屋事務所からインタホンがかかって来た。

「外国の方で、バイオリンを弾く方が楽屋にいらっしゃいますが――」

さて英語がペラペラしゃべれるわけでなく、このところ、公演がすむとそそくさと外人が楽屋に来て、実はいろいろ聞いたので、何となく断りたいと思い、

「その方ひとりかい？」と聞いたら

「日本の人がついておられます」という。だいたいが、このインタホンというやつは、そばに案内人がいるところでしゃべっている上、こちらの返事もそこそこに聞こえるという都合の悪さが気にくわない。

「あの、ちょっとまろしければ」

「日本人の方がお部屋までゆきたいといっておられますが――」

と技術がいう。困って「今、風呂(ふろ)に入るところだが、ちょっとなら……」と不機嫌(ふきげん)に返事をした。間もなく、細面の風采のよかろうぬ三十くらいの青年が、「失礼します」と、ドアをノックした。

「実は、アイザック氏が、このミュージカルを観て、大変感動して逢いたがっていますが、ちょっとおまろしければ、下の雑門というコーヒー店で待ってますが――」

「ああそう、どういう人か知らんが、一時間ほど休んで、また夜の部を演るんで、なるべくならお断りしたいが――」

「じゃ、部屋へ連れて来ではいけないでしょうか――」

「なんだか知らんが、楽屋は実語も話せんし、まろしくいってくれない？」

「そうですが、残念ですねー！」

彼はまったく残念そうで、しばらくつっ立ったまま、半襟の私をうらめしそうに見ている。

「何する人っていったかね？」

「アイザック・スターン氏ですよ」

「知らんのだ、ごめんね」

「バイオリニストです。有名なんですが――」

「いや、まったくその方はうといんでな」

「ちょっとでいいです。彼、すごく感動してるんです。ユダヤ人なんです」

"屋根の上のバイオリン弾き"はご存じユダヤ人の物語だから、乃木坂のアンというユダヤ人の飲みやの小母さん初め、イスラエルの大使や、その他もろもろのユダヤ人せめこあってるので、まさかと思ったが、この青年の真面にうたれて、「風呂から上がったらゆくから、コーヒー店で待たしといてくれない」と、OKした。

その男は黒いトックリのシャツを着て、マルセイユの居酒屋のおやじみたいな顔で私を待っていた。風呂上がりの勇気のたった私の顔を見るなり立ち上がり、待たされたことには何の不快もなげに、なんともやわらかい手で私の手を握りしめた。かと思うと、やにわに椅子(いす)を蹴(け)って私の横に坐り込み、ぐっとたきつけて来た。めんくらったが、私も彼の温厚さ、たたきながら、「やあやあ」てなことをいい、実は心の中では、ひょっとすると、こりゃおかまかな――と思ったりして、ようやく向かいあった。

彼は、ひどく興奮して、お前はどうしてユダヤ人の気持があんなにわかるのか――とか盛んに私の芸風をほめた。私は、卑屈に、驚く飾りが下手で、そういわれると、ただ恥じいるばかりだ――てたことを通訳させた。

そして、彼が熱いこんでいうには、楽屋お前のためにバイオリンを弾きたい――、場所はどこでもいい、いちばん都合のいいのは、文化会館でNHKの演奏会があるから、その稽古(けいこ)の時に来てくれないか、練習をやめて好きな曲をお弾きかせる。もし都合が悪ければ、私のホテルでもいい、お前のために、数の最高のものをしあげたい、とまくしたてないい分である。

まだ、ここでも私は、アイザック・スターン氏が、オイストラフ氏と並ぶ世界で指折りのバイオリニストであるということを知らないのである。

「ご厚意は有難いが、実は私も忙しいのでその招きには応じられない」

(いや、何という無礼な返事であったろう)彼はそれでもニコニコして、何時か機会があれば、君のためにいつでもバイオリンを弾くよ――と何度もいって私の手にキスして別れた。

後日、何気なく、日本の有名な音楽家にその話をした。その時から私は、完全に馬鹿あつかいをされるようになった。

何というもったいない――、何というおろかな――、物を知らぬにも程がある――。君ひとりのために弾いてやるというのは、むこうの国では最高の……と、私はきき飽きるほど、数氏から罵倒と、攻撃をうけた。「ピカソが君に惚れて似顔描いてやるといってるのに、そんな勇なんか知らんと、断ったようなもんですな……」と有名な絵描きさんにまで顔蹴(ひんしゅく)を買った。

二月、日生劇場に再び"屋根の上のバイオリン弾き"を公演する。

こんど彼が来たら、家へ連れて来て、誰にも聞かさずに朝まで弾いてもらうつもりだ。そして興がのれば、枯すすきもお調いしようと思っている。

1977.2.9 読売

論調

名バイオリニストの米国論

米国が世界に誇るバイオリニスト、アイザック・スターン氏＝写真＝。政治のキッシンジャー、文学のソール・ベローと並ぶユダヤ系アメリカ人の最高峰だが、この巨人が、USニューズ誌とのインタビューで「米国の人種偏見は薄れており、米国は世界文化の中心になった」と次のような"体験的米国論"を披露した。

◇

「今日の米国で最も印象的な出来ごとは、この国がいま、偉大な社会革命の真っただ中にあるということです。例えば、マイノリティー(ユダヤ人、黒人、プエルトリコ人、メキシコ人、中国人、日本人など)米国内の少数派民族を指すこの言葉。以前には、米国の社会は、これらの人たちをなかなか受け入れませんでした。しかし、現在では、米国の社会は渋々ながらにせよ、確実にマイノリティー容認の方向に向かって歩を進めています」

「米国は、物理的な革命を引き起こすとなく、こうした社会変化を成し遂げつつあります。若しこうを振り返ると、この目まいの変化が、かくも早く迅速に起こることを、だれが予測し得たでしょうか。これこそ、米国の活力を立証する最も健全な社会的側面の一つだと思います。とっても、米国は、すべての難問を解決した――と言っているわけではありません。ただ、世界の他の主要国と比較しますと、米国はそうすることが正義にかなっている」と考えた場合、人権の統合〉による変革を受け入れてきた、と言いたいのです」

「音楽や演劇の八演奏〉と〈音楽〉を混同していることです。米国では、千人の子供をごく普通の水準に達し、持っていることは、十人のずば抜けた才能を育てるのと同じ価値がある果たしているのが、全米各地の世界文化の中心である、と言切ってよいと思います。世界各地の主要な交響楽団、歌劇団、演奏家、劇団が、米国での公演を望むのは二つの理由からです。米国には、芸術家の実力を率直に認め、力のある芸術家は、実力社会的機能が、世界の他のいかなる地域よりも確立しているからです。だからこそ、西側世界の中心になったのだと思います」

◇

「もちろん、米国はいぜん、いくつかの制度上の問題を抱えています。教育制度が極端に分散化していること、金持ちの子供と貧困階層の子供では、〈教育の機会〉でも大きな格差があることです。もう一つの問題は、米国民が、教育の〈質〉と〈量〉を混同していることです。米国では、千人の子供をごく普通の水準に達し、持っていることは、十人のずば抜けた才能を育てるのと同じ価値がある果たしているのが、全米各地の平等化の方向に向かっています。こうした動向にもかかわらず、われわれは〈教育〉の考え方を放棄してはなりません。こういう要素を育成しないと、文明は活動を停止してしまうでしょう。最高の能力を備えた人びとによる、ギリギリの最高水準の教育によって、頂点は持っている力を発揮してきたではありませんか。教育は〈量〉的な達成ではなく、限り〈質〉の維持も同時に考えていく必要があります」

「米国の芸術活動を飛躍的に向上させる上で、大きな役割を果たしているのが、全米各地の大学で上演される劇やコンサートです。非常に多くの大学が『コンサート・コース』を教養課程の一部に組み入れていますが、これは大学生だけでなく、大学キャンパス周辺の市民の啓発にも奉仕しています。十年前には、この方法が、これほど効果的な推進力になるとは考えてもみませんでしたが……。それに、インジアナ大、イリノイ大、ノースカロライナ大、ミシガン大、カリフォルニア大ロサンゼルス校など、総合大学の音楽学部が、一流の音楽学校に成長したのも嬉しいことです」

(2月14日付、USニューズ・アンド・ワールド・リポート誌)